

## 岬の蔭で

### 野間信樹

「ほいッ。砂潜<sup>ボケ</sup>五十四に磯蜆<sup>アケ</sup>貝<sup>ミ</sup>三キロ。  
——きようは、一人かな？」

「うん……」

開けたばかりのエサ屋の店内は足もとが冷えた。

——部屋の中ならとても十一時間は堪えられない。五坪ほどの釣り筏のデッキの上で、師走の寒気にこごえて一日竿を指す。

チヌといふさかなをこぞんじだらうか。一般的には黒鯛。このごろでは、料理にあがるさいの名のほかは、「クロダイ」と片仮名で表記される例らしい。しかし、おおむね東海北陸以西の釣り場では、推古朝以来の古名のままに、いくらか敬意を込めて、茅渟<sup>チヌ</sup>という尊称をもちいる習わしである。海に竿さすその釣趣、穂<sup>ほ</sup>太<sup>た</sup>に活きづくけなげなあたり、あわせた竿を肩口に止める衝撃の快、三段引きする躍動感の高尚、鏝<sup>ちり</sup>つたうろこが水にぎら

りとヒラ撃つ燻し銀、野武士のごときつらなまえがたまらない。

本年の竿納めにひとり海に出た。六時。未明の漁港の上屋のまえに、明りを灯した一番船が接岸される。この遊漁店のこの日の客は九名だけか。釣りと餌のたぐいが、次々と船のうえに乗せられてゆく。

釣り場へいそぐ船上は、熾りかけた練炭焔炉に肩を窄める防寒着の影が固まっている。暗い潮が船腹をなめてどろりと船尾のほうへ退いてゆく。湾を取りめぐる背山の東の稜線上の空が、いくらか明るくなつた。暗い海。湾口方向へといそぐ一点の灯りは、磯の寒グレ（メジナ）ねらいの釣り船である。

七分ほどできようの筏に着いた。他の釣り客らの手を借りて、釣り具を降ろす。板囲いのポットン便所が突つ立つだけの、真新しい全面米松材貼りのきれいなか

り・釣り専用筏である。かすかに防腐剤の臭いがただよっている。うつすら霜が降りていた。

「納竿、最終五時なアー」

船長が操舵室から声を張りあげた。手をあげて諒解する。

他の釣り客は深場のコワリ（真鯛養殖生簀の四隅にできる隅切り上の釣座）であろう。その生簀に向かう船の音を見送れば、岬の鼻に近いこの筏の上で、このあと一日ひとりぼっちである。

暁暗の海。空に薄明の色が染まりはじめた。遠くをゆく遊漁船のエンジン音を引きながら、釣り具と備えつけの桶などを手順どおりにならべ、持参の座椅子に、よっこいしょと尻を落として、指の感覚だけで仕掛けをつくる。

この間に、何とか彼誰<sup>かたれ</sup>時の湾内が見えてくる。年の瀬の空気が凜烈<sup>れんれつ</sup>だった。

朝一番は、寄せ餌のダンゴはつかわない。きのうの釣り人のポイント跡に、撒き餌の磯蜆<sup>アケ</sup>貝<sup>ミ</sup>が残って、警戒心をなくした茅渟<sup>チヌ</sup>が、夜を徹して漁っているかもしれない。他人のふんどしで朝から相撲がとれることがある。竿をなびかせながらリ

ルの糸を出してゆく。水深約七メートル。まもなく仕掛けは底に届いた。

潮止まりの頃合いか。大潮廻りにしては流れがわるい。水が冷たいかして、暫時待つても穂先に反応がない。竿を高く持ちあげて、ゆっくり沈めてき・いてみたが、足もとふきんに、生きもののけはいがあるようにはなかつた。

山腹の樹々が、漆黒と暗緑色のまだらの影を見せて来る。味爽の空を映した海のあちこちに、光りの粒子がちらめきはじめた。ほほ明度のみ海である。真鯛の連結生簀の影は、数連が並行にかさなっている。四隅のコワリはほほ満席になるようである。遅れて来た他店の客が、足場の板をわたる影法師があわただしかつた。まだ暗らみに目が馴れないかして、両手に重たい荷を提げながら、瞬時立ち止つては、足もとのロープの結び目に、パツと一瞬、ひたいのLEDライトを点灯させ、なおも慎重に、爪先でさぐりもつてわたる者がある。茅渟が人工の灯りをきらうことを知悉している人である。釣りには厳しい師走の海だ。海千山千の、年季の入った釣師が多い。

遠く湾奥の釣り筏にも、客を下ろす船がある。その遊漁船か。埠頭へ引き返す漁船の航跡がふちにあたつて碎け、筏がゆれた。随分大きくかたむけられたが、海はエンジン音が遠ざかるとともに、すぐにひたりと鎮まつた。

普段なら、逐次おもりと刺し餌を変えて、足もとのみならず、広く遠投などころみながら、中層から低まで、小一時間ダングオなしの広角落とし込みでねばつてみるのだが、今朝は雑魚のうごきもないので、早々にダングオを練ることにした。まずはまえもつて、磯蜆貝は半キロほどを、ざつと砕いて足下に投げこんでおく。市販の箱入り米糠ダングオをベースに、押し麦、蛹ミンチ、その他の集魚剤を混ぜ、砂も少々加算する。海水を酌んで備えつけの桶の中で練りあげる。水温摂氏十三・五度。気温一度。ダングオを練つたあとに凍えた指を焔炉にかざす。練炭の孔が真赤に熾つてきていた。解凍しきれぬアミ蛸のブロックをナイフで削いで混ぜ、磯蜆貝は砕いて少々ダングオに包む。やや大きめ、ソフト・ボール大のものを四つ五つ足下に落とす。

とほん とほん とほん  
と、かろうじて明るくなつた海が弾む。右手で一・五メートルの竿の尖を水中に浸け、仕掛けが底に着くのを待つ間に、あぐらをかいた股ぐらの、ブーツに乗せた左の手の甲に、塩水にかじかむ古い皺を見て、

六十か……  
と、しみじみ思つた。

還暦をむかえたころの祖父は老けていた。家で寿賀を祝つた記憶はないが、一日、赤いちゃんちゃんこを着けていた。「おつたか。ちよつと来い」

小遣いほしさに肩を揉んだ。祖父は黒さんのようなペしやんとつぶれた赤い頭巾をかぶつていた。絹だったのであろう。ぴんと左右に張り出した綿入れの肩は手触りがよかつた。年をとつてうれしいはずはなかるうに、いやにこにこしていた。午後には、その格好で、ふらりとどこかへ出かけ、夕刻には戻つて、もう一度揉めと言つた。

朝から祖父の機嫌はよかつたが、なんだか一そうにこにこしていた。肩を揉み、

叩いているうちに、祖父が、ちゃんちゃんこの左脇のへんを気にしはじめた。肩口あたりの匂いを嗅ぎ、爪ではじき、親指の腹でしきりにこすった。

「生うなよ」

何のことかわからぬことを口止めされた。大枚百円札を一枚くれた。脇を引いて舌で濡らし、袴のすそをめくりあげ、ラクダの股引きになすりつけていた。見てはいけないものを見ているような気がしていた。

未完成であろう。祖父愛用の雑記帳に、川柳まがいの自由律短詩が遺っている。

ちゃんちゃんこどこがどうする二葉  
が花め

推敲のあとがいちじるしい。別句なのかもしれない。ひらめいた当座は、

ちゃんちゃんこ孫の指さき紅のあと  
だったようである。

四年後。起きてこないの、寝床をのぞくと、ぼっくり死んでいた。あの時分は、六十四が人間の寿命とおもって受け容れた。祖父だけでなく、その年齢なら誰もそれがぐらいは年をとって見えた。

気の持ちようなのか。あの日の祖父の歳に並んだようには思えぬが、困ったDNAは隔世的にも引くようである。

「オートサン」

と呼んで来る女がいる。

猫が跳び出して来たという。二年と八ヶ月ほどまえの夜九時半、最寄駅から自宅へ帰る途次、女は車道との段差に坐りこんで、左のふくらはぎをさすっていた。倒れた原付バイクのまわりには、こわれた破片が散らばっていた。一一九番を呼ぶのはいやだと言った。自宅で晩酌中の知友の整形外科医が、携帯電話で問診に応じた。左脚腓腹筋の肉ばなれであろう。同一部位への打ち身があったやもしれぬ。部位がかさなったのだ。顛倒するさいに、足がバイクの負荷を支えそこねた上、後輪がふくらはぎを蹴って薙ぎ倒れていた。フルヘルメット、ジーンズと厚手の長袖シャツがさいわいしたか。バイクの破損ていどに照らし、血をみるような外傷は、かすり傷すらないのが意外であった。湿布かテーピングをしておくだけでも痛みは和らぐ。女は、跛行すらおぼつかない脚を庇い、街路樹のプラタナスの幹にす

がって立ちすくんだ。

道交法違反は承知のうえで、免許証不携帯のまま、ライト、ミラーとフェンダーの破損したバイクに乗せて、胸と腕にかかえるようにして知友の自宅へ走った。

「骨折はないとおもうけどな、いくらか内出血がある。これやと、松葉杖がいるでさな。念のため、レントゲンだけ撮ってみてみよか。あした、一ぺん、病院のほうへおいで」

女は泣きだしそうな当惑を顔にした。

院長手づからのテーピング措置のあとでは、アパートへも送って行った。玄関の低い上がり框に坐らせるまでに、女は、「すいません、すいません」

が卑屈にひびくほど、教かぎりなく言った。三週間ばかり後には、顛倒現場に待ちかまえられ、「すつかり治りました」

との謝辞を得た。X線撮影の結果については、翌日、知友からも、骨に異常はなかった旨の診断報告をうけている。まあ、そのていどで済んでよかった、と頬笑むと、唐突に、慄えるような小声で懇えられた。

「あのッ、—— すいません。おカネを貸

してください」

あまりのことに、声を挙げて笑ってしまつた。

「原チャリ修理おしたでしょ？ 派遣の仕事を休んだでしょ？ 三回、タクシーで病院へ行ったでしょ？ おカネがないの。すいません」

実父母は早く離婚し、再婚した母親が継父と近県にいただけである。派遣の仕事はこの四月にはじめたばかりで、一週間も休んだうえに、派遣もとや職場に前借りを願ひ出で得るような環境にはない。すいません、と強がりながら窮境をかたる声には嗚咽もあつて、友人間とはいえ、守秘義務ある医師が患者の容態を他に洩らすことがあるのか……と、ふとおもつた。治療代が未払いとのいやみ、または女の生活が逼迫している旨の忠告だつたのだ。笑つてしまつたことをいからか羞じた。

「わかつたから、そんなことで泣かないでくれる？」

嫁いだ美娘より、七つも若い。そんな女に何事を期待したわけでもなかつたが、その後、しばしば逢つてメシなど喰わせ

てやつていた。徒歩圏というにはやや苦しいが、住まいはそうそう離れていない。

休みの日には、きちんと規矩どおりに片付いた1Kの部屋で、手ずから作つてくれるようにもなり、食材の買い出しには、父娘づらさげて、近くのスーパーやショッピング・モールへも、のうのうと、はた

目を気にすることなく行つていた。その年齢、その容姿には地味かつ質素にすぎないように感じていた身なりに替え、アパレル店の店頭で目につくものを、たまにはひとつふたつと押しつけていた。「すいません、すいません」もホツとするほど少なくなつて、恋心というとおだやかではないが、初老の胸に、彼女への主観的傾倒がいくらか起つていたやもしれぬ。精算している女をレジの外からながめ、いつまでもこうしていたいと思つたものだ。そうそう手のこんだ料理はできないが、ネットで検索したレシピどおりのものを、熱心につくつてくれていた。

半年ちかくもたった土曜の午後の混みあう店内で、人ごみ中に顔をのぞかせて、「オトサーソン」と、このあとつづくこととなる呼び名で初めて呼ばれた。「買つ

ていッ？」

化粧箱入り完熟マンゴー、黄色い林檎を入れた駕籠、食べ頃までには尚早のメロンをかかえていた。

「これも買ッ」

「これもいいッ」

ブランド和牛のステーキ用サーロインのトレイと、シャンペンボトルを手にしてすねた。きいておかなかつたことに落ち度はあるのだろうか。誕生日なのだとぼそつと言つた。和牛トレイは商品棚にもどし、その場から、ホテルのレストランにささやかな夕餉の席を取つた。

はなやかなはずの二十二歳の夜が、初老の見えた男とふたりだけの食事では、侘びしいものがあつたはずである。1Kの部屋に帰つて、小さなケーキと剥いた林檎、賽の目を入れたマンゴーをならべ、シャンペンをあけて、電気の消えた、ブレゼント代わりにホテルのテナント店で求めた薩摩切り子風のキャンドル・グラスの灯りの中で男と女になつた。そのまぎわには、ぐつたりと、顔を逸らしてただ焰をながめていた。

「ローソク、へーきッ」

「ちよつと遠いな。吹き消してみるか？」  
「見ててもいいの？」

—— 全日制の高校では酷いじめを受けて定時に転入し、独学と、専門学校へも通ってCGということを習ったようである。派遣先の本業は、鉛筆一本から事務機器、オフィス・インテリアの設計施工までを手がける地元で昔からある文具商であるが、近ごろでは、工業用機材にかんする機能シミュレーション画像、PC向けCMのキャラクター動画、パチンコ台の液晶画面の動画製作等にまで手をひろげている。部屋でも趣味で、デスクトップ二台、ノートパソコン一台の三機を駆使し、深い幻想的な架空の森に、擬人化されたふしぎな動物を遊ばせている。バーチャル動画話を思うがままにつくれるようである。その一節を略記しよう。

原生の暗い森の木の洞に栗鼠が食べられる。尺取虫が唾ついていると、木の葉がかぶさってこれを圧殺する。驟雨が来て木の葉が流される。その洪水に森が浚われ、古木が倒れる。折れた古木の株に新芽がひこばえすると、子栗鼠が出て来て囓ってしまふ——

飽きぬ玩具を黙々といじっているように見える。正面や横から見られていると落ち着かない。TVを見るか、本でも読んで待てと苦言を吐かれてしまふ。ベッドに寝転んで、長いこと、ただぼんやりと、キーとマウスを駆使する女を斜めのほうからながめていることがある。ふたりの空気が豊穡とも感ずる稠密な空間が、部屋いっぱい醸成される。たまには紅茶など煎れてみるのだが、「レモンがないな——。マーマレードでいいか？」

返事もあり、視野の端には入っているはずのカップが冷めて、なお気づいてくれないことがある。

フアッション、おしゃれ、コンサート、スポーツ、旅行、テーマパーク、ゲーム、文学、映画、TVなどに対しては、ほとんど、または、まるっきりかんしんを示さない。少女アニメの単行本を少々と、図鑑のたぐいを多岐な分野にわたってあちこちかじる。呑んで飲めないことはないうのだが、酒はこのんでたしなむほうではないのであろう。グラスを半分も空ければ、そつと指で押しこつちへ返ら

せてくる。デートというとおこがましいが、出かけるといつても、釣りに出る場合は、ドライブがてら車を走らせて、名古屋市内の大型書店で、コンピュータ関連図書、図鑑のならんだコーナーをうろついたあと、いくらかましな構えの店で、夕飯を摂って帰るだけのことである。ブルーベリー狩りの農場では、持ち帰り用の容器に摘んだばかりの実を入れて、まぎれこんだ山蟻一匹に、ふしぎな関心を示し、しげしげとながめていた。システム上、森の動物はもつと簡単な操作でもつとリアルな動きが出るようにする、具体的に何の用をなすものかアテのないものであるが、対水面衝突衝撃破砕シミュレーション・システム。なるべく早い時期にこれを完成させるのだと言っている。

すつかり明るくなった岬の山の稜線高くに鳶が舞っていた。昨今の鳶は啼かぬのか。

びく、ひよろひよろろろろく

という声が雲をあげた往昔が懐かしい。針に砂潜を刺した勝負のダンゴは、テニス・ボールほどの大きさに握り、いく

らか静かに落とす。ダンゴの重みで仕掛けが沈む。糸はリールをくるくる回して小気味よく出ていった。

仕掛けが底に届くと、穂尖を曲げて十秒ほど待つ。ダンゴが割れるとピンと跳ねる。穂尖をなだめてあたりを待った。

湾内一円静まっている。波といえる波もない。潮が動かなければ、ダンゴ・エキスが茅渚の鼻まで届かない。じれったいほど動かない。ひとり竿を握って空を見る。さっきの鳶がまだ同じ高みに翔っていた。

仕掛けをあげて刺し餌を変える。空打ちぶんのダンゴをいくつかと、まるごと磯蜆貝を刺した仕掛けには糸を挟んで丸め、餌を外に出してまた落とす。

とぼん とぼんとぼん とぼんと音がする。波の音はない。

ダンゴは濁りと香りの尾を引きながら冬の水を墜ちてゆく。四メートルでいどは沈んでゆくのが見える。浅場にかけては筏にとは予約を入れたが、師走の海では浅きにすぎるか。澄んだ潮の中に外道の小さな影もない。水温不足のようである。昼の底りを過ぎて、暖流の流れこ

む次の込み潮時刻を待たねばならぬやもしれぬ。

薬罐の湯がそろそろ熱くなって来たかして、チリチリと口に湯気が立ちはじめたが、珈琲は沸くまであと少しつつしむ。凍えた手を蓋にあてると、熱さがじーんと指に沁みた。

養殖コワリの釣りの人は、抱卵中の鰯ボラからすみ作りに狙う者もあるらしい。やはり難儀しているようで、むなししい影がしきりに糸を手練っていた。

空が蒼々明るんで、西にたたなわる山稜高く、朝日が幾本ものすじをなして射している。蒼緑の稜線の向こうにわだかまった真つ白なガスが、峰のへこみをあふれ出て、その一角の重みが、さも海溝へとくぐる白鯨さながらに、ゆつくりと山肌を下り降りている。尾根もちがいが規模も小さいが、これもこころで風伝慮しと呼ばれる現象か。早朝の湾景が、ことのほか美しい。しんと風いだ真つ平らな海に、ダンゴを落とす音だけがいちじるしい。

とぼん  
いや。湯がちんちんと沸きはじめ、薬

罐の蓋がぼこぼこふるえ、湯気はげしく立っている。目分量で紙コップにインスタントの珈琲を入れ、ぼとぼとと熱湯をそそぐ。そつと指で囲いもつて口にはこぶ。おそるおそる唇を濡らしてから、クーラー・ボックスの上に据えて、冷めるのを待つことにした。

薬罐の音と、遠ざかる漁船の音をききながら、サンドウィッチを頬張った。穂尖は微動だもせず垂れている。

きのうが仕事納めのはずだった。きょうも一しよに来るべく、この後へもふたり分の予約入れていた。それが、幾日か派遣の仕事が延びた、今年最後の釣りに行けなくなつたと肩をおとした。プログラムにミスがあつたとすれば、陰険なバグを放り込んだか、さもなれば、隣りでのろい仕事をされてかりかりしていたからだ、と罵倒されたものらしい。言いがかり以外の何ものでもない。何かの疲労腐蝕劣化脆断びんたんシユミレーション・システムにかかわる映像プログラムに、触媒に特定の溶剤を使用したばあいのみ、ある温度設定下では、時系列に対応する画像

変化の不定時点のところどころで、対象物の表面に、現実には起こり得ないもつれるようなひずみが生ずるといふ、原因不明の不具合があり、キヤリアOLの尻拭いの鉢が廻されていた。忘年会にも呼んでもらえず、この年の瀬に、年末年始の休み返上で、プログラムに帳尻が合うまで、ひとりただ働きのようにである。

ここのとこの少子化と、長い長い不況とで、人口二十万人を割ってしまった小都市である。社長とも番頭（専務）とも互いに知らぬ仲ではないが、裏から手をまわしてこんな不合理の是正をもとめていたヒには、女とのこの関係におかしな支障が惹き起る。結果、職場の更なる陰湿な辛酸・逆風に、女をさらしてしまふことにもなりかねない。

「人間、何かといろいろいやなこともある。だれしもそうやって、がまんしながら成長するんだ」

汎用的な慰め言しか口に出て来なかった。むろん職場の人間関係の、ただの愚痴にすぎないようにも思われる。なぐさめが欲しいだけなのか。派遣のみじめさは、ベッドの中でこぼして来るだけである。

聞いてやるだけで収まることもあり、泣き音を洩らしながら肌をすり寄せて来ることもある。正社員との間には、日々多少は軋轢も生ずるであろう。睦言に女の口から一方的にきくだけでは、経緯がうまく伝わってこないばかりか、なかなか真偽もはつきりしない。

一度言いそびれると、そうおいそれとは口にできなくなるもので、そんなことどもまでがこもこもひっかかかってきて、未だに社長や番頭とは親しいあいだがらであるとはいい出せないでいる。何で今まで黙っていたのか——と、平手打ちの一つも喰らわせられそうである。このかんけいが、派遣社員の惨状の上になり立っているからか——と。

もつとも、今回は大して不満はないようだった。忘年会に出るはずのチーフSEが、休みに入るオフィスを点検しておくふりをして、誰もいなくなつたところでそつと教えてくれた。ここは我慢してきばつてきちつとやっておけば、新年度には正社員として遇されるであろう。きが社に來て四月でちょうど三年だ。実力も実績も、CGクリエーター、プログラマー・クラスはとづくに超えているかな。新年度には、今のアプリ担当の人的機能の半分を、独立のセクションとして立ち上げることになっている。AI事業にも参画できる体制だ——。いいか？

中途または昇格採用でなく、迂遠になつても年度採用のかたちをとるのは、派遣もとの調整に難航したこと、社の旧態然たる雇用規約・給与基準とのかんけいで、そのほうが、専門学校卒のCGデザイナーにすぎないきみを、事後、ぼくほか現アプリ担当SEの半数で組織する当該新システム開発セクションのチーム・スタッフとして、新たに入社するAIE二人、二名のSEと対等の、大学院新卒スペシャリスト同格のSPとして採用することにむりがないからだ。自棄になるな——

にこにこしていた。「そうなの？ よかった。よくやったな。しかしさ、それを先に言ってくれないと、公然のパワハラをいたすに黙過している、めちやくちやな職場のように思ってしまう。いくらなんでも心配になるからね。ぼくも菌の浮くようなことを言わず

にすんだ」

「私がうれいしときには人はおもしろくないんでしょ？ いじめやなやみにめげているとおかしがる。どっちがよころんでもらえるのかわかんないの」

「……………」

「だから、時の順番ッ」

聞いた利那の内耳のへんが均衡を崩し、一瞬、ことばを失った。幼時から、嫌われるがおそろしさに、育ててくれた実母や継父の顔いろをうかがいながら生きてきたのではなからうか。おもわず口を突いて出たのは、かなり焦点のぼけた、そこからのがれようとする初老男のあがきの外的ものではなかった。

「どうこんでもらえるって。——あのね、話すあいてが親しいやつなら、わかってほしいこと、言いたいことからまず言わないと。まあまあ、よかったよかった。チーフSEか。周りに、きみのことを、そんなふうにきちんと評価してくれる上司がいるんだ。ちよつと、ほつとしたな。……………」

しかし、私服要人警固の意味以外に、SPという頭文字のことばをはじめて聞くんだけどね。きみの、その、SPにな

るのに、何か国家試験でもあったの？

どういった資格。そんなに頑張つてたか？

「あした、チヌが釣れたら持つてくる？」

午前三時。出掛けには、すやすやと眠っていた。釣りに着替えたあとで、保安灯の下に立ちつくし、いじめは小学校のころからずつと受けてきたという女の寝顔を、エアコンを切つて寝ている部屋に底冷えを覚えるまで、ぼんやりとながめていた。ちらつと洩らされた、ねじれたような感性の、その肝心のところでちらになつてやれそうになく、滲みあがつて来る寂しさに、あふれ出そうなため息を、抑え抑えもつて見まもつていた。還暦をむかえたこの脳だ。もう、人の深層心理の領域を云為することに思考がおよばなくなつていく。

ベッドに就くまえにこしらえたのか。閉じたノートパソコンの上に、『朝食サンド イカダで食べて』と書いたメモを乗せたバックの包みがあった。

釣りに来られなくなった彼女の手づくりサンドは、ひとつは、薄焼き卵・ハムとかいわれ大根・プチトマトの薄切りを

はさんだもの、もうひとつは、サニーレタスのあいだに、蟹蒲・賽の目のアボガド、ホールカーネル・コーンを具にしたポテトサラダが分厚く塗り込められたそれだった。凍える指だ。包んだラップがなかなか剥がせない。このころでは、ネットに頼らず、いろいろ工夫して作つてくれる。二種ともに、プロセス・スライスチーズが入つており、インスタント珈琲ながら、早朝の潮の香かんばしい釣り場の釣り師の口によくあつた。

潮はあくまで澄んでいる。足下に鱻イサナの小さな群れがわだかまる。筏が岬の山の蔭にあるので、日が昇つたことに気づかなかつたようである。岬の突端先の海上に、明るすぎる冬の日を浴びて、アオリイカ狙いのエギをキャストしている人のボートが浮いていた。

こんなに押し詰まつてからも出漁か。何隻かが一せいに外海そとに出るようである。湾口あたりのエンジン音が騒がしかった。あるいは団体客を乗せた沖釣り大会の釣り船なのかもしれない。時計を見ると、微妙に八時半を過ぎていた。

穂先がすうつと素直に垂れたままうご



きがなない。まだ鱸のお目見えもないようだ。向うのコワリの釣り座でも、釣り師の影がちゃんと凍てついていた。

とぼん、とぼんとぼん、とぼん

はじめて女と一しよに釣りに出たのは、あの誕生日の日から間もない頃である。茅渚師にとっては多少情けないものある外道であるが、けしきのよい大ぶりの真鯛が釣れたので、帰路のみやげに持ってゆき、翌日、がさつな釣り師が朝からキチネツトに立って、鯛メシ、刺身と照焼き、かぶと煮と端肉の吸い物を腕を揮ってやった。釣り、私も一べん行つてみたいなあ……と、その時、テーブルばいの真鯛料理をまえに、面伏せに目を下げ、女のほうから釣り師に水を向けるようなことを言ったのだ。このかきり釣りの釣季にあつてはもつとも好ましい晩秋の、風も小春日和の海の初めての筏の上で、小茅渚と平鯛を手にして小禽のようにはしゃいでいた。何かのことに、屈託なく、しんから悦んでいる彼女に接し得たのは、これが最初で、唯一ではないかとおもわれる。

以来、大つびらな旅行もデートも出来ない代わりに、ほぼ月に一度の割りでつれて来る。茅渚のけはいや魚信が穂尖に出ると、

「釣っちゃる、釣っちゃる、釣っちゃる……」

と、か細い声を前歯の裏に破裂させ、鼻の奥で囁くようにつぶやくのが癖で、横でこれをやられては気になつて、釣りに対するこつちの集中力が掻きみだされる。冬場の茅渚は、前あたりから本あたりまでのインターバルが、じれつたいほど長いことがある。時を待つ目にまばたきも許れないほどに、ときには五分、十分と一心に凝視を強いられていることがある。茅渚特有のその魚信がきているようである。

「あのね。その、ぶつぶつ言うのをやめないか」

「オトーサン、見て。あたつてる——。釣っちゃる、釣っちゃる、釣っちゃる、釣っちゃる、釣っちゃる、釣っちゃる……」

厳しい漁師がゲンをかついで、女は船に乗せない、というのは正解である。しかし、いなければいけないで苦しいほどの哀切感にみまわれる。幽閉同然の、四方

が水の筏の上で、つれて来ればよかつたと、胸がいたく締めつけられる。こころよい波に揺られる筏の上で、不憫に勃興して来ることも一再ではない。非力な女性にしては、釣りに対する勘はよいほうであろう。ありがちな女性本来のねばり・専心没頭力とあいまって、根気も反射神経もあやしくなつたこの釣り四十余年の矜持が屈服させられることがある。着こなし・化粧はそこそこ板に付いて来たもの、ちよつと奮発した洋服に身をかためてビルの下の人ごみ中をゆくときよりも、フィッシング帽を目深にかぶつて海に竿を指す、日焼け止めクリームのほかはスツピン同然で来る釣りの彼女のほうが、ずつときいきいきと可愛くはなやんでいる。静止姿勢のまま、はずんでいくかのようである。

ただ、帰りがけ、魚籠スガリに生かしておいた茅渚を持ち帰るさい、その急所（側線端と鰓蓋との間、または側頭部）に、何のためらいもなく、可憐な小声で、「エイツ」とひと声、一気に釣りアイテムの小型薫口はくちやナイフを刺して、てしまうところなど、内面に秘しめつ彼女の嗜虐傾

向・残忍性に、ハツとさせられることがある。二年のあいだそれなりの釣果をかさね、この作業に馴れたせいもある。しかし、冷静にすぎるその手もと、瞳のおだやかさ、「エイツ」の声ともに白い歯に光るアルカイックな陶酔を内包させた危険な笑みは、どこか、それとはちよつと違うところから来ているような気がしている。魚拓を録るに魚臭を厭うということがある。鱗のぬめりを刷いて、いつくしむように墨を塗り、かぶせた和紙を手で押さえて象つて、丹念にたんぽをなでて浮き上がらせる。この間、口もとに妖しい笑みが纏綿している。猫はよけたのだ。そんなはずはないと、つとめてみずから不安を掻き棄てる。

仲間と釣りに出る日はそうもゆかないが、ともに釣行した日はむろん、平日にひとり海に出たさいも、帰りがけには部屋で疲れを休めてゆく。祖父ゆずりの人一倍の肩凝り性なのに、釣りに出た日から数日間は、嘘のように軽くなっている。ただし、専用座椅子に一日あぐらをかくので、波が高くあまりに筏が揺れた日は、腰を痛めることが稀にある。ふだんは肩

を揉み、叩いてくれる手が、そんな日には腰に来る。最近、めつきり上手なつた。みやげの良形茅渚を見て、自分がゆけなかつた釣行に嫌味を吐かれ、「行きなかつた」と、悔しさをこめて、石のごとくに握つたこぶしを患部にねじこまれることはままあるが、諍い事は、種といえる種さえまるで生れてこない。

肩も腰も楽になり、よい加減の時刻にはなるべく帰るようにしている。肌を重ねなかつた日ほど、家までの頬がゆるんでいたりする。俳句仲間にか将棋倶楽部にかでも、祖父にもまたそんな可愛い女がいたのであろう。あの上機嫌はこれだったのか……と、一種の感慨に祖父を思い出す。

それにしても、最近、仲間うちで、ちゃんちゃんこを着せられたという声を聞かない。

冬の日に、この筏はいたいいつまで蔭なのか。多分歳のせいもある。手は炙れても、あぐらの足は焜炉にかざせない。海水を張つた生き餌のうつわに指を入れ、ダンゴを握つたあとの手を水汲みバケツ

の中で濯ぐたび、股ぐらに組んだゴムのブーツに雪がかかつてしまう。じつとしてみると、この足だけはどうしようもなく冷えて来る。菓罐にポリタンクの水を足しがてら、ブーツの上から煮え湯をかけるという、アナログ以前のことやってみる。

対岸は、今にも海に沈みゆきそうな漁村の屋根が日を受けている。べた風の海面が、岬山の稜線とおりの日向と蔭に区切られている。日に照らされたコワリヒトリガモの人の手にとどきそうなるころには、緋鳥ヒトリガモ鳴らしい六、七羽の水鳥が浮いている。さかなのけはいがないのである。釣り師の影が、まき餌を撒いて鴨と遊んだ。沖アミか。いそいで駆け寄るいのちの粒が羽搏いている。

ととととととととと

と、船外機のついた小型の舟で船長がようすを見に来る。

「どうやな」

「朝から一度もあわせていない」

「餌盗りもおらんかな」

「凧倒れだね。——きのうは、何時ころから」

二三時、過ぎてからやつたな。水が温んで来なあかんのやろのう」

茅渚の時合いのことである。昨夜の確認電話では、客十一名で、午後から五十五センチの年無し（地方によっても異なるが、俗に出世魚とされる広義の茅渚は、カイズ——チンタ——狭義のチヌ——年無しチヌ、の順に呼び名を変える。そのうち年無しとは、年齢不詳。つまり、漁師にも学者にも、未だ生きたその歳月を推定できないでいる五十センチを超えるサイズの茅渚の謂いで、茅渚師ら垂涎の勇逸である）一尾と、四十オーバーのもの四尾だと言っていた。水も凍る詰まりにつまった年の瀬だ。良形は出ても、数はそんなものであろう。本業に牡蠣の養殖業をやっている船長は、生でもいけるが、

「ちよつと炙つて喰いなんせ」

と、玉網たまもの中に大つぶの名産牡蠣を五つばかり落としていった。

菓罐を下ろして牡蠣を焼く。泡を吹きはじめた口に貝剥きナイフを差し込んで、殻をこじあげ、二つをすすするようにして頬張った。

見るともなく女をながめているだけで、辛くなつてくることがある。

秋口。もう大ぶんとびれた夏の部屋着の、ロンパースの短いパンツのすそのすきまに鼠径部へんがのぞき、下に何も履いていないような気がして、かくにんしたく、いたずら心で膝をひらかせてゆくと、脛から顚顚あたりを上気させていた。髪を掻きあげてその顔を見、胸をのぞき、腋窩、脚、内ももと、ただ露出している肌を目で舐め下ろしてただで、脛の裏で白眼を剥いてくずれていった。小さいながら下着はしっかり着けていたものの、このごとく、おもしろいような反応を見せることがある。胸が傷むのは、佳境に忘我してゆく表情と声に接したあとほどいぢじるしい。

釣り同様、月に二、三回がちよどよい。そうは體が利かない。口では、なんともないの、ヘイキ……と言ってくれている。気のせいならよいが、たぶん足りてはいない。ピンクいろの経口薬を試してみたこともあるが、けもの未満のような気がして、一度切りになっている。

今頃は、ひとりオフィスのデスクに向つている頃か。CGのことも、動画に表徴される心的傾向のこともわからぬが、もとは暗く攻撃的だった絵が、最近どこか、背景の森の木洩日の射しよう色彩かげん、動物のうごきに明るさが出た。キヤラクターの栗鼠は、古木の洞の裏からびよこんと逃れ出て、横の細木の枝へととび移り、あやうくぶらさがって隣りの幹へとはいあがる。枯れ葉を喰った尺取虫は、口を尖らせて、透けた葉脈の下で窒息しそうだった息を噴く。驟雨が森を満たして湖水を作る。流水を漕いで子栗鼠があそぶ。釣りに出るようになってから、森の湖水に、海の生き物までを登場させている。物語の筋がだんだん複雑になっている。

「人はなんで毀したがるの？ 森も泉も海も地球も壊れてく。どうして人の経済活動が毀すことでしかないことに気づいてくれないのかな。誰でも働いたおカネのぶんだけ毀して。あれはそれぞれの破壊の量の推定できるニューメリカル・バリニューだよ。そのうち居どころなくなるね」

押しもおし詰まったこの年の瀬に、ぼつんとひとりオフィスでただ働きか……。チラツと女のそんな影が頭をよぎる。口入れが利かぬこともないと思われるが、真摯に一生けんめいやっているのだ。竿をあおつて穂尖を軽くいなしたときに、殊更裏から老社長や番頭に手をまわさぬほうがよい、と何かの思念が結論を出した。まだこの先しばらく一しよに釣りに出られるだろう。彼女によく合う人なみの服、化粧品、タイトルのみでどういう書なのかも識別できない英文書籍、二人で食べるメシ代ぐらいは上面もできる。嫁ぐ日には、できればせめて実娘とおなじぐらいにはこしらえて、家から送り出してやりたいという夢ごとも、ついつい想い描いてしまう。真意を問われるなら、つづけられるものならむろん今のままのほうがよい。

びく、ひよろひよろろろろろ

鳶が啼いた高みの声に、はつとした。

風がない。波がない。潮も動かない。海に音がない。入江を繞る山の木々が光りを浴びている。ガスのとれた西の山が青みを爆き、稜線が紺碧の空を劃して聳

えていた。

防寒着のフードをめぐつて、鳶を探して湾上の空を見わたしてみろ。明け方には翔つていた空に鳶の影はなく、数十年ぶりに啼いた声の発生場所と覚しき空は、抜けるように澄みわたつていた。岬山の尾のえの松の梢の葉の針が、克明に見えるような気がする。鳶はたぶんその向こう、この岬の日向のほうにいろのだ。

足もとを十センチほどの小鰻の群れが走りぬけている。ラインに触れたやつが穂尖を咬しくたき、周囲の数十匹が、鋭角に、切つて弾かれたように進路を変えた。水が温んで来たのである。竿の尖端に、きようはじめての海のいのちの戦慄である。

真鯛生簀の幼魚には、餌が与えられている。時が来さえすれば自動的に装置が作動する。黒いシートのかかった生簀周りの潮のおもてに、小さな波がさわがしく立ち起こり、網目に幼魚七万匹の躍るしぶきが見える。潮がざーっと音を放っているらしい。おこぼれに与ろうと駆け寄る緋鳥鴨の羽たたきが滑稽だった。

こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ

と鳴る快いエンジンの音に見返ると、岬の断崖下に、アオリイカ狙いのボートが来ていた。

その磯の岩に水位の下がつた跡がある。一メートルの余は引いたようだが、こころも潮がうごかなくては釣りは勝負にならぬ。岩を洗う波の山さえ見えない。

からだはその気になつていろの日にも、なおふとした折りに、内心の何かにおびえ、女が目を見ひらくことがある。突然からだから潮が引き、瞳をおどきせながら、再発する過去の口癖も泣き声に、わななくように肌が逃げてゆく。

「ごめんなさい。きようはムリッ」

「どうして？」

「……………」

「何なの？」

「さらわれるッ。——すいません。ごめんなさい。すいません」

一度や二度ではない。そういうことが幾度もあった。強いては質さなかつたが、これまででは、問うても烈しく頭をふつて応えることをいやがつていた。

「喋つてしまえば少しはらくなる。この

歳になるとね、滅多なことではくのみもちがゆるぐことはない」

「おおかたそんなことではないかとおもっていたが、先般、やつとその傷口を吐露してくれた。高一の二期期の中間試験のさなか、三人の同級生に輪姦されたと言った。喉をかすれ出る一語々が、うわごとごとく、ひいひいと音をあげていた。握りしめてくる両手の指がわなないて、手首に食い込んでいた。女子が首謀——？平易には、ちよつと考えにくい。要約しよう。

もういじめないからとやさしくされて、泣く々々主犯格の男子生徒の家でからだをひらいた。もう、いじめないよね？ときいたら嗤われた。嗤い声を合図のように、次の男子二人があらわれた。開かれたドアのうしろには、出てゆく主犯格の男子生徒とグー・タツチして、この謀議の完遂をたえあう同じクラスの女子生徒が立っていた。ああ？ ああ？ 侮蔑の横目とくちびるが、ベッドでおびえる女を冷徹に窺っていた。

ああ、ああ、ああああ  
「口ふさいどけつ！ テメーもわめくんな

じゃねエ。これぐらいですまねエからな男を貸してやってんだ。さつさとこの世から消えてまえて。ほんまムカつく。テメーにうろちよるされんの、胸くそわるいんだよつ！ 何たのしんでんだ。さつさとやんだよつ」

ああ、ああ、ああ、あああああああ……

——PTSDが根にある哀調か、または、いじめを受ける性格的要因がそのへんにあつたかは知るよしが無い。

膚え・性徴・生活知力は年相応だろう。顔だち・肢体・性格は、すこぶるキュートで愛くるしく、初老男の胸をメつける。しかるに、まなざし・しぐさ・ことばづかい・声のいろ——、彷彿する資質的傾向の、少女つぼさがぬぐえない。いわゆる舌つ足らずなのではないが、口のはこびにやや緩慢なところがある。強ばつたような歩き方をする。飲食ビルの玄関ポーチ前の、ちよつと角のずれたグリーティングひとつまたぐのに、爪先にこころを飛ばし、きびすに小さなリズムをつけて弾んでかわす。手のひらをパツとひらげた両腕を、きちんと坐つた膝に突つ

張つて、肩を窄めてモニター画面に見入っている。アスペルガー症候群、また、オタクと呼ばれる人のごとき他人との交流会の僅少、世知や知識の偏頗狭窄にとどまらない。人格形成をつかさどる経験累積系の、何か重大な心的部位に傷がついている。成人女性のあの根を生やしたようなおしつけがましい牢固な即物性、小狡い感じが稀薄である。イんでいところ、正座の姿勢が、根も重みもないまに、水底に軽妙に静止しているように見えることがある。幼児性とまではいわないが、資質的成長がそれ以前、十三か四、いや十一、二歳のころで止まってしまっているかの心象がある。

しかし、今ではそんな傷も心の最深奥に凝結し、結晶化している。心に核となつてひそんだ小さな瑕瑾が、水晶内部にひそんだそのごとく、陸離な光りを放つているような気がしてならぬ。還暦男の身のほどしらずの恋心が、女に純一性の輝きばかりを見てしまうのか。内に何かの使命を帯びているかのようなまばゆい清冽は、夢も遠くおぼろに、凋落してゆく者の冬の思考が見せていることなのか。

アナログ脳がデジタル世界にはいつてゆけぬ。穢身清心、長幼の差が、相対的に感じさせてしまう思い上がりか、謬見のかもしれない。逢ってその瞳に接し、声を聴く、人格のふしぎに感動していることがある。

「妖精さんが、森の泉のなかで、ゴンズイ玉みたいに、かたまつて遊いでいたらおかしいの？」

「何の妖精？」

「人になりたい、ナナフシが、ヤツデの葉っぱに止まったまんま、いつまでももの思いにふけて、ぜんぜんうごいてくれないから、葉っぱに映っていたその子の鬩が、そのあいだ、妖精さんになって、こっそり森の中へあそびに出るの。泉のほとりまでゆくと、ほかの妖精さんたちが集まっていたから、みんな水に入って、舞々しながらひとつにかたまつて、水の中で、人のかたちになってあそんでいたから、笑わないでね。こういうのは、へん？」

才能、または優れた頭脳の他の一面、いや、単純に、個性ないし感性和考えたほうがよいのである。過去が遠ざかっ

てゆくかして、最近、ようやく心を開いてくれているように思われる。英文コンピュータ関連図書、同電子工学・量子力学関係書、同数学基礎理論、解析数学、位相・解析幾何学関連書籍、その他いろんな分野にわたる図鑑のたぐいが整然とならんだ書架の下で、リアルにうごめく線状3D生物スペック、記号・英単語・数値ばかりを表示させたパソコン画面にきよ々と見入っているところ、また、海に出るようになって、海の実体――つまり、海水温、その塩分濃度、潮流、質感等はいつとも一律ではないことを知り、

あの対水面衝突衝撃破砕シミュレーション・プログラムを修正するため専用サイトに問い合わせた、『温度および塩分濃度の高低による海水の比重または膨縮率にかんする本文計算式、加えて、当該値を有する媒質へ衝突する物体の速度と入射角の差異に対応する衝撃度合い、および当該衝撃波動のフリーク頂点と谷の高低値、ならびに同秒速値にかんする本文計算式の正誤等』についての支援回答が返るのを、うきうきしながら待っているところなど、もはや古い

の見たアナログ男には手の届かぬ遠いところにいるような気がするところがある。その思いでみれば、昨夜は、打ち明けるには抵抗も迷いもあるう膠着していた自己の是非々々にかんするねじけた心の裡が、すなおにすつと口に出されたようにおもわれる。暗い過去の傷痕が、ようよう治癒ないし昇華してゆく兆候なのだとかえようか。こんな初老男のせいでも、せつかく明るいきざしが見えて来たもの、たとえば他にあるべき同世代の者との交流機会を阻害していることもありそうである。次にふたりで釣りに来たさいにでも、茅渚を生きぬく彼女の口もとと瞳に注目してしよう。もしや釣り好き女子のあざやかなお手並みとしか見えなくなっているかもしれない。

やはり彼女には、裏に廻って梃子入れするなど無用であろう。古い事務機屋の組織変更、雇用規約にまで触れたチーフSEとかの言が、凡庸な高校生の恠しい譎謀に等しいものとは思われない。

きょうはまだ、エサ屋のおやじと船長のほかに誰とも喋っていない。祖父の

享年は超えられるのか。この頃、時々不安がよぎる。無用となつたこんな年無し男の脳天には、ピンタ代わりに、寝ている隙に、「エイツ」とひとつ、鶯口なんぞが振り降ろされそうなる危殆感が、背筋をしたり降りりすることもある。それでも六十年、かつてないほど居心地がよい。入江の森の妖精とのそれのような、ありえぬふしぎな夢をみているのではあるまいか。老いらくの恋とおもわることはい外ではあるが、おのれの翳もさだかでない、日の遮られた岬の蔭の筏の上で、穂尖に茅渟のけはいが見えるまで、このあとまだまだ女のことを想つてしまいたい。

三つ残しておいたサービスの牡蠣を焼いていた時に、また、岬の日向の側で鳶が啼いた。

びー、ひよろひよろろろろ

午後には茅渟は来るのだろうか。それより早く日が当らぬか。それまでは、ダングをこまめに打つておく。寒い。

とほん とほん とほん

やがて昼か。弁当をとどける舟の音が埠頭のほうからやってくる。

とととととととととととととととと。

彼女も先日、二十四になつた。いずれ近々中にも岬の向こう側へ翔んでゆくのであろう。釣りをよそ事の、身を斬られるような耳順の迷想が、うれしくおもえることもあるらしい。そのときはそのときと、それなりの心構えは出来ているつもりでいるが、三月四月ではきびしいか。今のところはうまくいっている。

——了——